

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
これまでの検討の経過について

第 10 期教育課程部会はこれまで 4 回の会議を開催し、審議を行ってきた。諮問事項に関するこれまでの審議内容及び主な意見は以下 2. のとおり。今後も、2. にある項目に加え、3. に掲げる項目について引き続き審議を進める予定。

1. 開催状況

第 1 回：令和元年 6 月 10 日（月） 10：00～12：30

- ・新学習指導要領の円滑な実施に関する取組について
- ・Society5.0 時代を見据えた芸術教育の在り方について 等

第 2 回：令和元年 7 月 24 日（水） 9：30～12：30

（新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会、教員養成部会と合同開催）

- ・教科担任制について
- ・先端技術を活用した教育の在り方について

第 3 回：令和元年 9 月 4 日（水） 10：00～12：00

- ・STEAM 教育について

※ 令和元年 10 月 15 日（火） 13：00～15：00 に開催した「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（第 4 回）」においても、STEAM 教育について審議を実施。

第 4 回：令和元 10 月 29 日（火） 9：30～12：30

- ・基盤的な学力の確実な定着に向けた方策について 等

2. これまでの審議内容及び委員の主な意見

学力について

【ヒアリング内容の概要】

■埼玉県学力向上施策の概要～埼玉県学調を中核とした PDCA の推進～

発表者：埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課 八田 聡史 課長

■戸田市における学力向上施策等について

発表者：戸ヶ崎勤委員（埼玉県戸田市教育委員会教育長）

■春日市におけるコミュニティ・スクールとしての学力向上に関する取組について

発表者：福岡県春日市立春日西中学校 清尾 昌利 教頭

【主な意見】

- 教育再生実行会議第11次提言にあるように、全国学力・学習状況調査や各地方公共団体による学力や学習状況を把握する調査の利活用を、それぞれの役割を踏まえつつ促進することが、客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進にも資するのではないか。
- 全国学力・学習状況調査で測定できるのは、資質・能力の一側面であることを、学校、教育委員会、保護者等は改めて認識すべき。
- 各自治体等の教育施策に、全国学力・学習状況調査の平均点を上げることを目的とするものが多いのは問題ではないか。
- たとえ測定できるのが資質・能力の一側面のみであっても、悉皆で学力や学習状況を把握する全国学力・学習状況調査は重要。
- 全国学力・学習状況調査において成果が上がった学校に共通する取組を、学校教育関係者に広く共有し、実践を促すべきではないか。
- 全国学力・学習状況調査等の既存の学力調査で測定するのが難しいような資質・能力の側面も可視化するような取組が必要ではないか。
- 児童生徒の資質・能力の育成は、学校がチームとして取り組むべきであり、管理職である校長、教頭等の役割が重要ではないか。
- 管理職だけではなく、学校現場の最前線で子供たちと接している教師全員がカリキュラム・マネジメントに参画することが、子供たちの学びの質を高めるために重要なのではないか。
- 担任教師による学級経営も児童生徒の学力の基盤となるため、重視すべきである。
- コミュニティ・スクールの制度等を活用しながら、児童生徒の学力向上についても、家庭・学校・地域が目標を共有し、連携して取り組むべきではないか。
- 各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすれば、子供たちの学習意欲が高まり、学力向上につながるのではないか。
- 国立大学の附属小学校が、児童生徒に全教科等の指導を通して資質・能力をバランスよく育成することに取り組み、その取組を広めるのが、児童生徒の資質・能力の育成に有効ではないか。
- 全ての児童生徒にこれからの時代に求められる資質・能力を育むためには、児童生徒一人一人を見ていくきめ細やかな対応が必要ではないか。

STEAM 教育について

【ヒアリング内容の概要】

- 資質・能力の育成を目指す教科横断的な学習としての STEM/STEAM 教育と国際的な動向

発表者：国立教育政策研究所教育課程研究センター・基礎研究部 松原憲治 総括研究官

■総合的な学習の時間と STEAM 教育 —総合的な探究の時間の充実の観点から—

発表者：國學院大學人間開発学部初等教育学科 田村学 教授

■「理数探究」の充実と STEAM 教育について

発表者：文部科学省初等中等教育局 長尾篤志 主任視学官

【主な意見】

- STEAM 教育については、国際的に見ても、各国で定義が様々であるが、STEAM の A の範囲を芸術、文化、経済、法律、生活、政治を含めた、できるだけ広い範囲として捉え、定義することが重要である。
- STEAM 教育は、課題の選択や進め方によっては強力な学ぶ動機付けとなるが、STEAM 教育などの教科等横断的な学習を高等学校において進める上では、普通科、専門学科、総合学科など学科の別も考慮する必要がある。
- STEAM 教育の大規模な導入により、格差が生じる可能性について危惧されるが、目指すべき方向性として、新学習指導要領全文において掲げられている「持続可能な社会の創り手」という理念を尊重することが適当であり、STEAM 教育のような視点を取り扱う際には、資質・能力は社会としての Well-being を実現するための手段として位置付けられていることを特に重視する必要がある。
- 学習意欲に課題を抱える生徒が集まる高等学校において探究的な学習をどのように進めるかはこれからの課題であるが、そのような学校においてこそ、STEAM 教育などの探究的な学習を実施することが重要であるため、全ての高等学校において STEAM 教育などの探究的な学習が実施できるような取組が必要である。
- 高等学校の新学習指導要領に位置付けられた総合的な探究の時間・理数探究と、STEAM 教育とは滑らかにつながっている。これらの関係性をしっかりと学校に伝えていくことが重要。
- 高等学校が地域社会、大学、研究機関、企業等と連携しやすい環境をつくることが STEAM 教育などの探究的な学習を導入する上で、重要な基盤となると考えられる。
- STEAM 教育などの教科等横断的な学習を進める上では、各教科の学習を学校段階で円滑に接続させることも重要である。
- STEAM 教育などの教科等横断的な学習の充実の前提として、各教科等における資質・能力の育成が求められるが、そのためには、教科学習の主たる教材である教科書の記述や各種資料を適切に読み取る力を育成するとともに、教材自体についても、資料の内容を適切に読み取れるような工夫を施すべきである。

3. 今後の主な検討事項

- ・ 教科担任制の導入や先端技術の活用など多様な指導形態・方法を踏まえた、年間授業時数や標準的な授業時間等の在り方を含む教育課程の在り方
- ・ 特定分野に特異な才能を持つ者や障害のある者を含む特別な配慮を要する児童生徒

に対する指導及び支援の在り方など、児童生徒一人一人の能力、適性等に応じた指導
の在り方 等